

(2) 風張(1)遺跡出土の十腰内4式古段階について(図9-27~59)

十腰内4式古段階は、馬場瀬(1)遺跡が基準資料となっており、風張(1)遺跡では第15・29・30・35・42・151号竪穴住居跡が指標となる。しかし細分の可能性を残しており、幅広の縄文帯で構成された第29・30・35・42号竪穴住居跡は古い段階、比較的幅狭の縄文帯で構成された第151号竪穴住居跡は新しい段階に相当する。前者は関根達人氏の「十腰内IV群段階」と鈴木克彦氏の「十腰内4式」、後者は関根氏の「馬場瀬段階」と鈴木氏の「十腰内5a式」に対比されると思われるが、合掌土偶が出土した第15号竪穴住居跡(図14)に対して裁断を下すことが困難であったため包括的に捉え、中門亮太氏の「第1期の土器群」に対比させた(表3)。瘤付土器の初現に位置づけられ、仙台湾地域の西ノ浜式(古段階)、関東地方の曾谷式が併行関係にある。当該型式の器種構成は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器を基本とし、単孔土器や香炉形土器等が加わる。クランク状の磨消文様と襷掛け状文が併存し、刻目帯も残存する。壺形・注口土器以外の器種にも瘤状突起が貼付されるがまだ少数でしかなく、縄文地文では異原体による羽状縄文が多用される。

装飾の深鉢形・鉢形土器には、口頸部が直上したA類と屈折したB類の両類が存するが、前者は少数で、後者の方が卓越する。B類の深鉢形土器は5単位の大波状口縁(図9-27~29・33)が多く、器形は先行型式を踏襲する。口端は内側に肥厚するが、波頂部は強く肥厚しており、鋭角的な山形口縁(28)では親指状突起、緩やかな花卉状口縁でも波頂部に突起を配したような構成(27)が特徴となる。口縁部と屈曲部には縄文帯が巡らされるが、2列の刻目帯を圍繞した例(27・28)も見られ、刻目帯上に瘤状突起が貼付される。鈴木克彦氏は「貼瘤のある刻み目の付いた2列の隆線文が巡らされ」たものを「結節隆線文」として、「十腰内4式」のメルクマールに位置づけた(鈴木1998a:12-13頁(140-141頁))が、時期幅の限られた属性であり、従うべきであろう。また細い隆帯は刻目だけでなく、縄文帯の例も認め

られる。頸部が無文となる例(27)も存するが、一般には頸部と体部に磨消文様が展開しており、異原体による羽状縄文が充てられる。後期後葉~晩期初頭に盛行した入組帯状文が出現し、頸部と体部が同一モチーフの例(28)も認められる。B類の平縁は資料数が少なく、口端に端部が肥厚した突起が配され、頸部は無文で、体部に磨消文様が展開する(31)。

A類の深鉢形・鉢形土器では、バケツ形(30)やボール形(32)の器形が見られ、器高が口径より下回る例が多い。体部には磨消文様が展開するが、入組帯状文も認められる(30)。先行型式と同じく、屈折して口頸部が短く立ち上がる広口壺の器形も盛行する(35・41~43)。口縁部と屈曲部に縄文帯や2列の刻目帯が巡らされ、体部はクランク状や襷掛け状の磨消文様で構成される。41と42を同時期と見なすことに異論もあろうが、共に第15号竪穴住居跡の床面から出土した土器であり、42の口端の小突起は新しい特徴となろう。

粗製深鉢形土器は、底部が平坦で比較的大きく、器形は底部から直線的に立ち上がり、体部上半から弱く内彎して、口縁部が直上乃至は外傾する(40)。口端は肥厚した例が多く、器面には0段多条の原体による斜行縄文が施される。粗製の鉢形土器(48)の器形についても、同様の指摘が可能であり、無文の鉢形土器(51)も認められる。

浅鉢形土器は椀形(46)や直線的に外傾した例(44)、高台付(45)が認められる。先行型式の系譜を引くクランク状の磨消文様(44)も存するが、縄文施文の例(46)は後期末葉まで継承される(小林2010:図264)。襷掛け状文等を持った浅鉢を乗せた高台付(34)も存するが、馬場瀬(1)遺跡に比べると資料数は少ないように思われる。また台付皿形土器(59)も認められる。体部を凌ぐ高い高台が付され、皿形の内面に縄文や刺突が加えられたもので、口端には屢々小突起が配されており、当該型式を表徴する器種類型と言えるであろう。

壺形土器と注口土器との区分は困難であるが、注口土器では大型の球胴形に優品が認められる(47・54~56)。一般に器幅と器高が同等か器高の方が低く、口頸部・体部の2段作り(47・54)

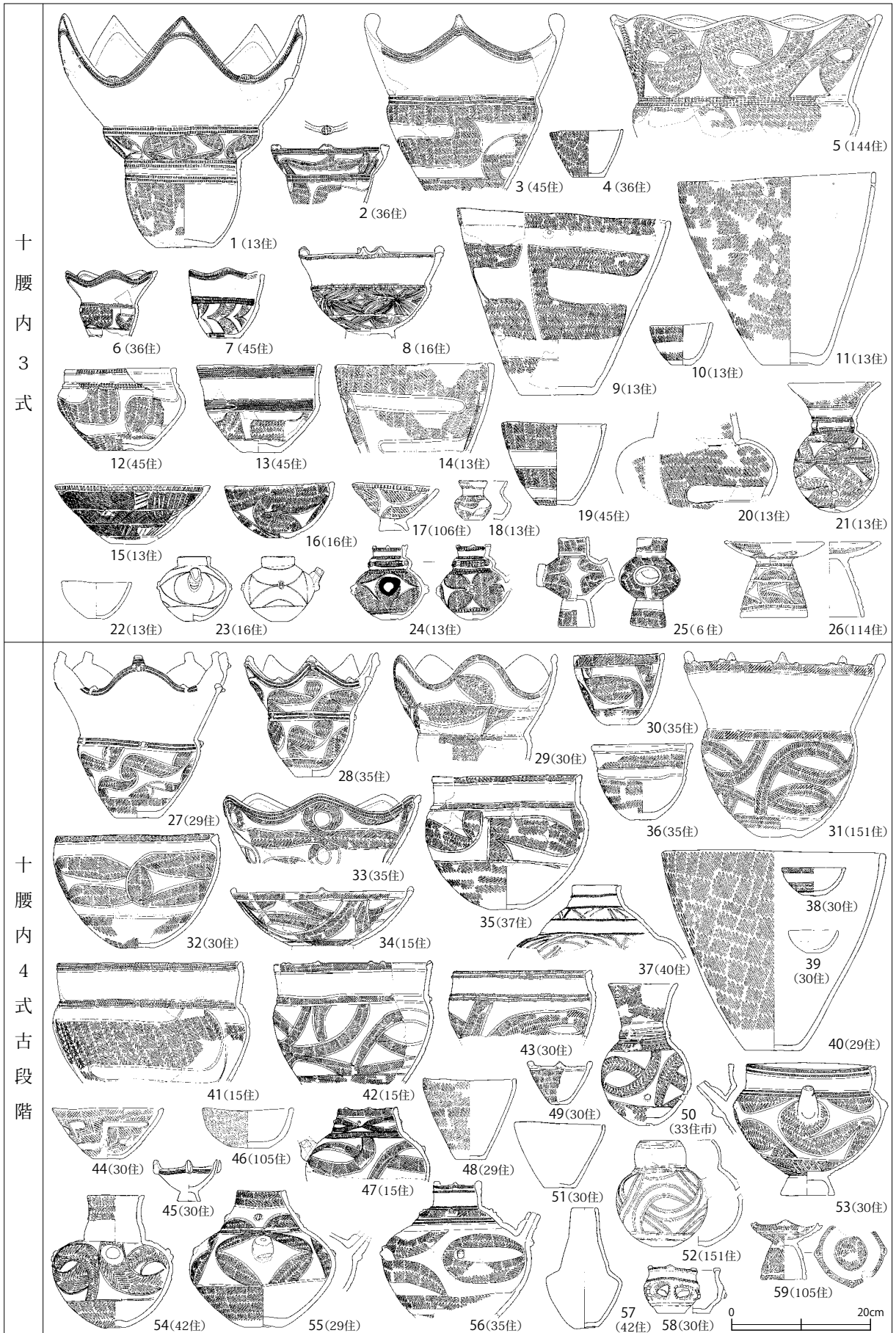


図9 風張(1)遺跡出土土器変遷図(1)

と口縁部・頸部・体部の3段作り(55・56)が存する。頸部が窄まる細頸で、口縁部は内傾又は直立しており、弱く外傾した例もある。体部には幅広の縄文帯で1段のみの大振りの文様が展開するが、3段作りの頸部は弱く凸彎し文様帯(Ⅱb文様帯)が形成され、また平行沈線(52)や微隆起線(37)の文様が展開した例も存する。注口部は基部直下に袋状の膨らみを持ち直線的に屹立するが、先端に環状の凹線を巡らす傾向が指摘される。古的様相の強い「鉢形系統」も存しており、53は台付の広口壺の器形の鉢形土器に注口を付したものである。57は細口長頸の無文壺であるが、形態の差異は存するものの、丹後谷地(1)遺跡や馬場瀬(1)遺跡にも認められ、当該型式に固有の器種類型と言えるであろう。

風張(1)遺跡では、先行型式に見られたラッパ状の突出部を持った台付の異形土器が認められない。併行関係にある西ノ浜式には存しており、東北部にも存続した可能性は高いと思われるが、用途的には器面に透かしを穿った香炉形の土器(58)が取って代わったと考えられる。

当該型式の文様を考える上で注意されるのは、これまでのネガ文様主体の構成からの脱却であろう。先行型式まではパレットナイフ状のネガ文様により、幅広のクランク状のポジ文様が描出されたが、その文様は当該型式にも引き継がれる(35・41)。しかしそれを変容させたような文様も多く見ることができる。ネガ文様の丸味を帯びた先端を逆に陥入させ、直線的な描線を弧線にすることで、入組帯状文(27・28・30)や襷掛け状文(34・47・50)が描出される。ポジ文様としての縄文が施された部位の効果が、強く意識されるようになった結果であり、文様描出手法の転換期にあったと考えられる。特に入組帯状文は後期後葉～晩期初頭を特徴づけた文様であり、その確立が当該型式にあったことが指摘されよう^{注4)}。

(3) 風張(1)遺跡出土の十腰内4式新段階について(図10-1~29)

十腰内4式新段階は、風張(1)遺跡の第5・32・163・168・182号竪穴住居跡が指標となり、津軽平野では旧浪岡町中屋敷遺跡のA区Ⅲ層出土

土器とSI01床面出土土器(工藤ほか2003)に対比される。中門亮太氏の「第2期の土器群」、筆者の瘤付土器第I段階に相当し、仙台湾地域の西ノ浜式(新段階)、関東地方の曾谷式と併行関係にある(表3)。当該型式の器種構成は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器を基本とし、単孔土器や香炉形土器等が加わり、先行型式まで顕著であった広口壺の器形の鉢形土器が明確でなくなる。文様ではクランク状の磨消文様や刻目帯が消失する一方、襷掛け状文等の幅狭の縄文帯を組み合わせた磨消文様が盛行しており、深鉢形土器にも瘤状突起が貼付される。

装飾の深鉢形・鉢形土器では、口頸部が直上したA類と屈折したB類の両類が存するが、前者は少数で、後者が卓越する。B類の深鉢形土器は5単位の鋭角的な大波状口縁に特徴づけられ、波頂部は装飾性に富んだ親指状突起が発達し、波頂間にも端部が刻まれ肥厚した突起が配され(1~3)、緩やかな花卉状の口縁は姿を消す。文様帯構成はⅠ・Ⅱa・Ⅱ文様帯の3帯構成が通例で、ⅡaとⅡ文様帯が同一モチーフで描出された例も認められる。口縁部に縄文帯が配され、瘤状突起が貼付されるが、縄文帯内に沈線を巡らせた例(1・3)も存する。大波状口縁深鉢の特徴は仙台湾地域の西ノ浜式に共通しており、時間的な対比が可能である。平縁のB類では、口端に突起が配され、頸部と体部は幅狭の縄文帯を組み合わせた磨消文様が展開する(4・5・10)。頸部が無文となる例もあり、6の頸部は縄文帯と無文帯で構成されるが、無文帯は幅広に描出される。当該型式では短頸の広口壺の器形の鉢形土器が不明瞭となるが、口端に縄文帯を巡らし、頸部が無文で、体部に磨消文様を施した深鉢形・鉢形土器(9)に変容したと考えられる。

粗製深鉢形土器は、底部が平底又は弱い上げ底に作出され、体部にかけて丸味を持って立ち上がり、口縁部が直上又は弱く内傾し、端部が肥厚する傾向が指摘される(14)。器面には0段多条の原体による斜行縄文が施されるが、異原体による羽状縄文も認められる。また粗製の鉢形土器(13)の器形についても、同様の特徴が指摘される。

浅鉢形土器では、装飾された資料は判然としな

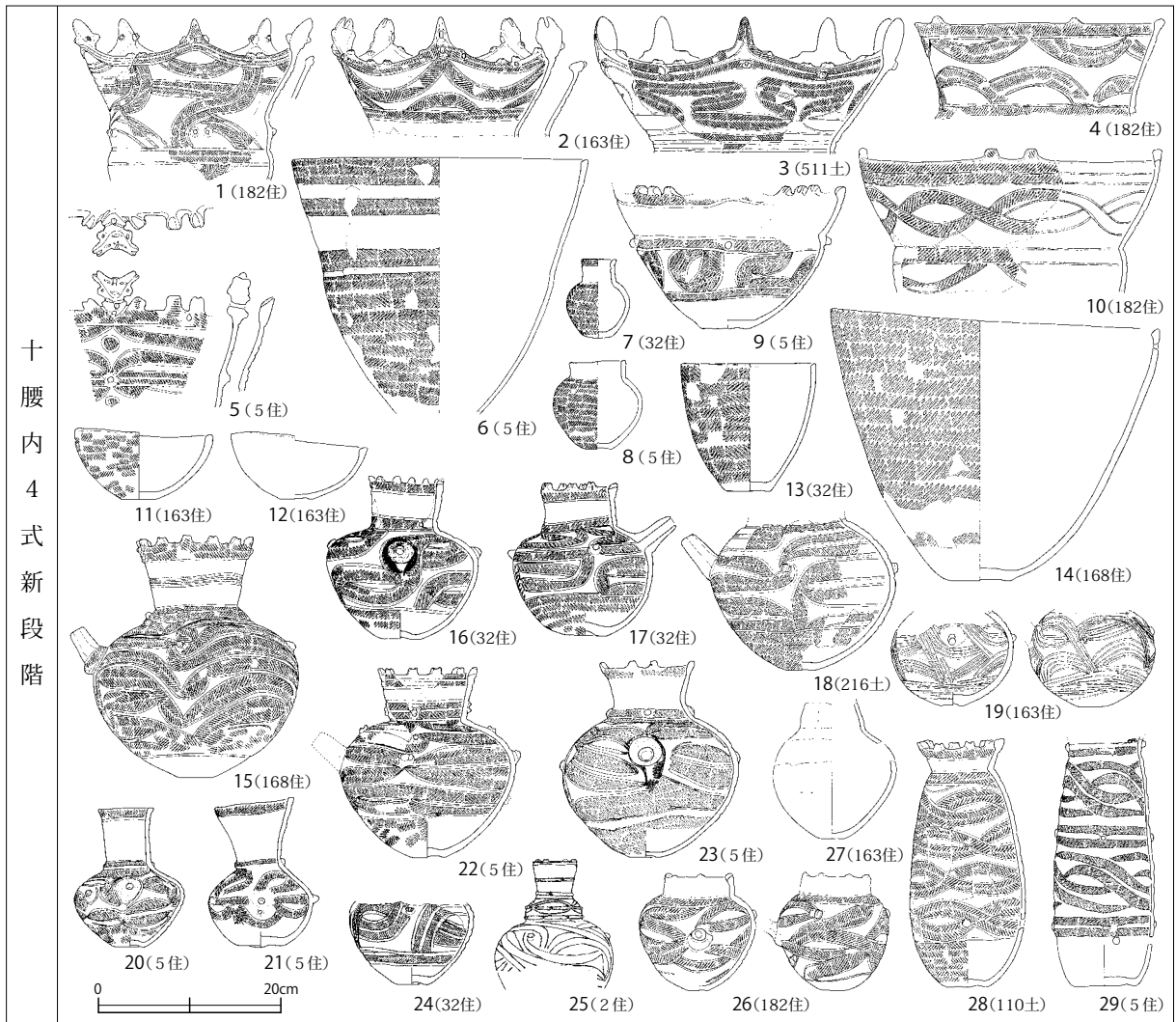


図10 風張(1)遺跡出土土器変遷図(2)

い。縄文施文(11)と無文(12)の両例は、後期後半を通して認められる器種類型である。先行型式を特徴づけた台付皿形土器も存すると思われるが、当遺跡では良好な資料を指摘することができなかった。

壺形土器と注口土器との区分は困難であるが、注口土器では器幅と器高がほぼ同等又は器高の方が上回る大型の球胴形に特徴づけられる(15～18・22・23)。口頸部と体部の2段作りで、口端に小突起が配され、口頸部が直立又は外傾してやや短く立ち上がり、体部は球状で幅狭の縄文帯を組み合わせた磨消文様が複段にわたって展開する。またやや小型となるが、細頸で長頸の注口土器も出現する(20・21)。口端は平縁で縄文帯が巡らされ、体部の磨消文様は体部下半まで及んでいる。その他に集合沈線(19)や微隆起線(25)の文様も存するが、特に後者は3段作りで、頸部

のⅡb文様帯が発達する。小型の壺では、細頸で口頸部が直立した縄文壺(7・8)が認められる。

底部付近に円孔を穿った単孔土器は、長胴で頸部が弱く窄まる筒形(28・29)となり、頸部が強く窄まる3段作りの壺形は姿を消す。体部には横位連繋の襷掛け状の磨消文様が展開する。無頸の筒形の類似した単孔土器が、福島県飯舘村日向南遺跡48号住居跡(鈴鹿ほか 1987: 図42-1)から出土しており、広域的な拡がり確認できる。

当該型式の文様を考える上で注意されるのは、頸部や体部の縄文帯の中央に沈線が加えられる点にある(1・24)。細身の縄文帯が二重に入り組んだり、縄文帯の結合部が沈線で描出された可能性が考えられる。また幅広の縄文帯に沈線を加えることで、細身に描出した可能性も考えられ、この沈線を挟んで異なる原体の羽状縄文が充填された例(1)も認められる。当該型式を判別する上

でのメルクマールに位置づけられるであろう。

(4) 風張(1)遺跡出土の十腰内5式古段階について(図11-1~57)

十腰内5式古段階は瘤状突起が多用される段階で、風張(1)遺跡の第7・54・63・100・175・32(市道)号竪穴住居跡が指標となる。関根達人氏の「滝端段階」、中門亮太氏の「第4期の土器群」、筆者の瘤付土器第Ⅱ段階に相当し、仙台湾地域の金剛寺1式(宮戸Ⅲa式)、関東地方の安行1式と併行関係にある(表3)。風張(1)遺跡には資料が豊富であり、細分される可能性も考えられるが、本稿では包括的に捉え今後の課題とした。当該型式の器種構成は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器を基本とし、単孔土器や香炉形土器等が加わるが、単孔土器は当該型式で姿を消す一方、ドーム形の橋状部を持った香炉形土器が明確となる。細身の縄文帯で構成された磨消文様や幾何学的な磨消文様等とバラエティーに富むが、装飾のない無文土器の占める割合も高くなっている。

装飾の深鉢形・鉢形土器では、口頸部が直上したA類と屈折したB類が存するが、前者は少数で、後者が卓越する。B類の深鉢形土器は口頸部が直線的で、傾きがより垂直に近い角度となり、屈折の度合いが弱まる傾向が看取される。大波状口縁と平縁が存するが、平縁が主体を占めるようになり、大波状口縁は4~6単位で5単位の規制が弱まり、波頂部の端部も薄手となり、波頂部間に小突起が配される(1~3・20)。平縁では突起を配した例と持たない例が存するが、前者では大小の突起を交互に配した例(7)、後者では小波状縁も認められる。瘤付土器では通例文様帯が横帯で厳密に区画されるが、口端や屈曲部に区画がない例(1・2・8)も存しており、当該域の特徴となっている。また頸部に文様を配し、体部が無文となる構成が主流となっており、頸部と体部に文様を持った1は極めて稀と言える。口縁部には通例貼瘤帯が巡らされるが、無文帯を介在させた例(11)が多く、頸部の文様は細身の縄文帯で入組帯状や鍵状等の磨消文様が多段にわたって展開し、無文部の占める割合が高くなる。また口・頸

部が無文となるB類の装飾深鉢(9)や、体部に縄文のみが施文された鉢形土器(30)も一定数存する。A類の深鉢形・鉢形土器は平縁で、口縁部が外傾又は直立するが、口縁に沿って貼瘤帯が圍繞され、体部の文様は体部中央~下半まで細身の縄文帯による磨消文様が展開する(10・13)。なおA・B両類とも地文として異原体による羽状縄文を施した例(2・4・7~9・15)が見られるが、先行型式のような整然さは失われている。

粗製深鉢形土器は底部が弱い上げ底となる例が多くなり、体部にかけて丸味を持って立ち上がり、口縁部が直上又はやや内傾し、端部の肥厚が弱まる傾向にある。器面は斜行縄文を施した例が多いが、異原体による羽状縄文(19)や口端が小波状縁の例も存する。また粗製の鉢形土器の器形についても、同様の特徴が指摘されるが、小波状縁(23)や無文(22)も認められる。

浅鉢形土器は数量的には少ないが、無文化の傾向にあり、装飾は口縁部や体部に巡らされた貼瘤帯のような帯状のものに限られる。通例平底の底部から内彎気味に立ち上がる器形となるが、丸底(31)や高台付(17)も存しており、縄文施文の浅鉢形土器(33)も一定数認められる。

壺形土器は口頸部と体部の2段作りが顕著で、小型では細口の長頸壺(25)、中・大型では口頸部が直立した縄文施文の広口壺(26・41)が見られる。注口土器と同じく無文(40)も存するが、縄文施文の壺形では頸部が凸彎した3段作りの例も認められる。

注口土器は当該型式の中で、最も発達した器種であろう。2段作りと3段作りが併存するが、器幅よりも器高が大幅に上回った均整のとれた器形に特徴があり、口・頸部の伸張が著しい。体部は球状又はやや上位が張り出し、口縁部は直線的又は外反気味にやや外傾した形状で、底部が小さく作出される(34~37・39・43~46・50)。無文の場合は器面が丁寧に研磨されており、装飾を持った注口土器は口頸部が貼瘤帯で、体部上半が細身の縄文帯を組み合わせた磨消文様で構成される。頸部の凸彎部に装飾文様を配した例(43)や低い高台付き(53・54)も見られる。無文の注口土器には、口頸部が直立気味に内傾した広口の2

十
腰
内
5
式
古
段
階

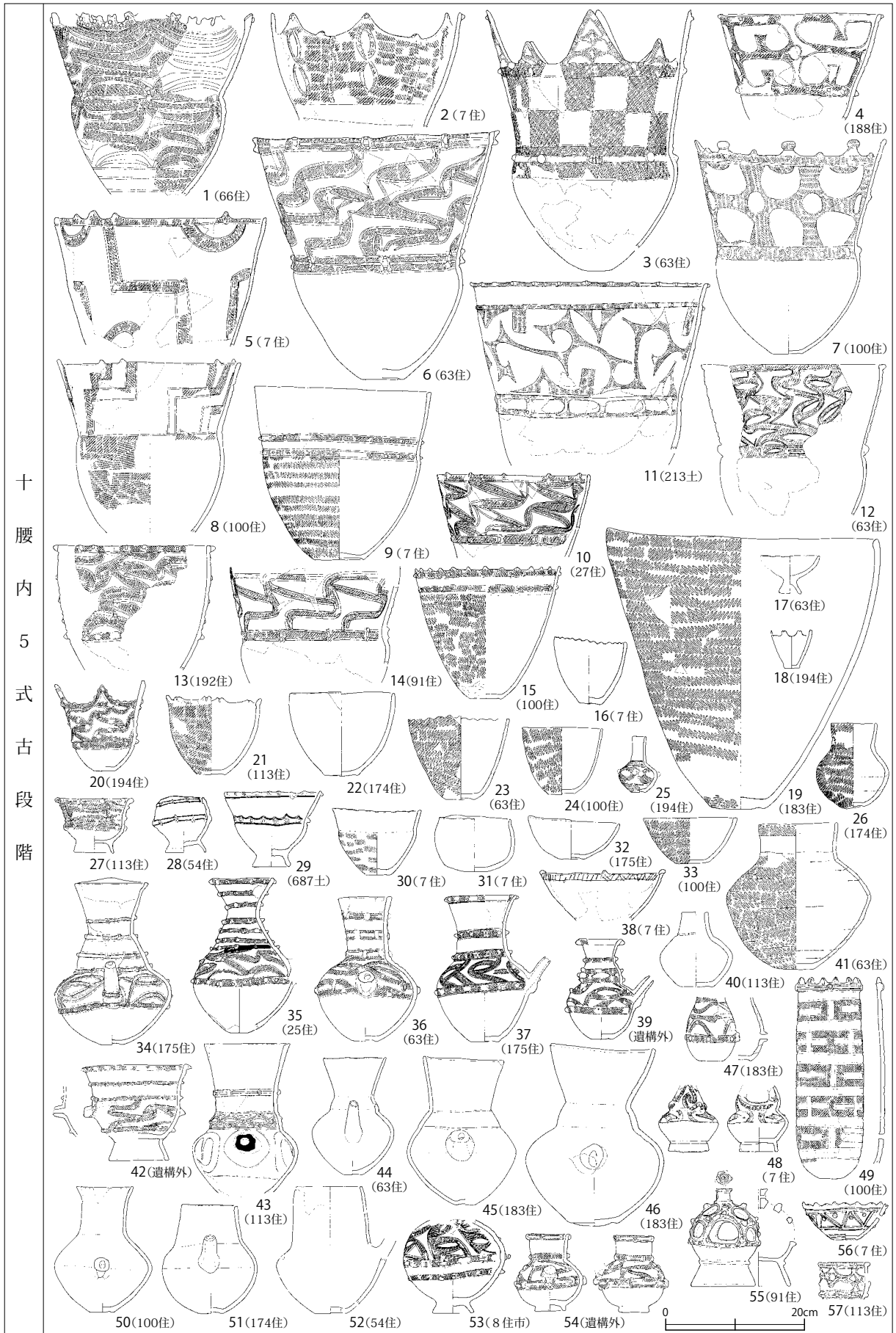


図 11 風張 (1) 遺跡出土土器変遷図 (3)

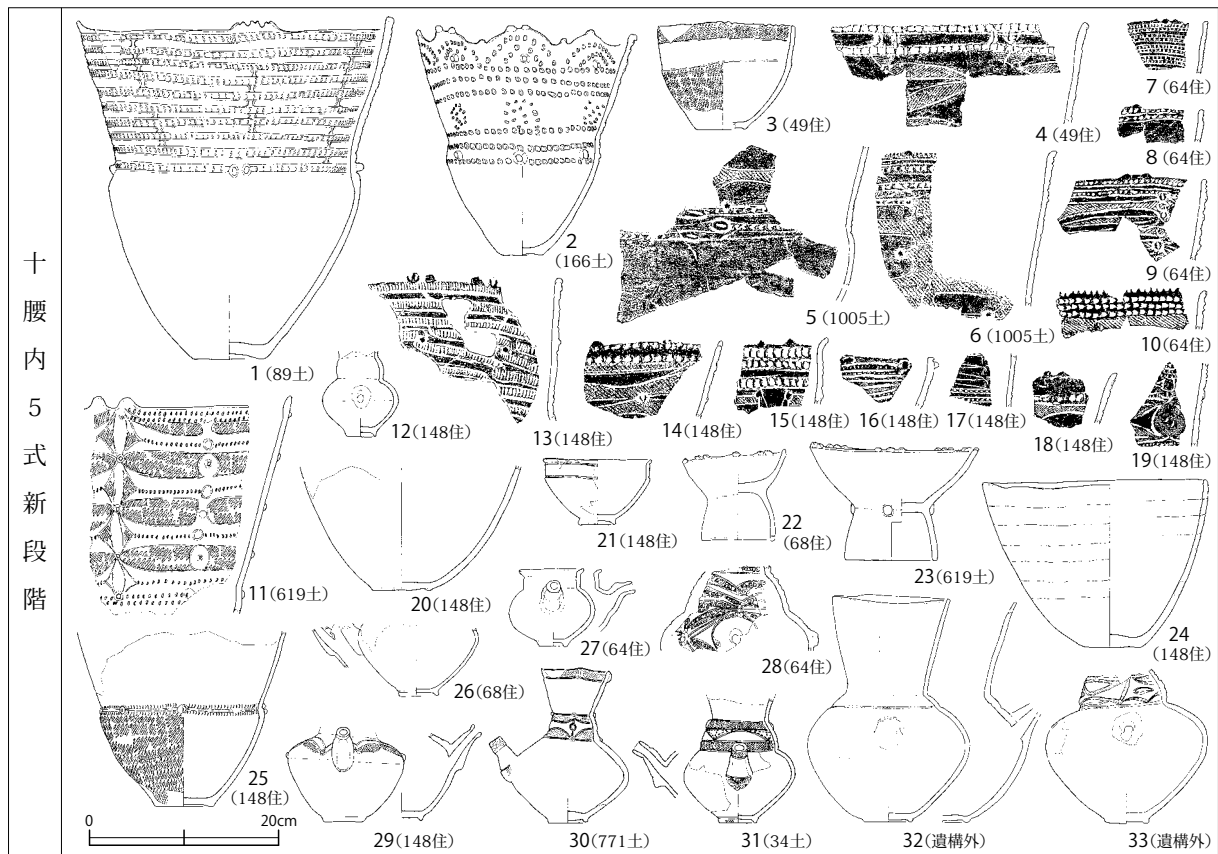


図 12 風張(1)遺跡出土土器変遷図(4)

段作り(51・52)も認められる。また屈折した鉢形土器に注口を付した「鉢形系統」の注口土器(42)も存するが、最最後出の事例となろう。当該型式の注口部は、一般に細長く外反気味に屹立し、先端が窄まり、基部直下に弱い袋状の膨らみを持つ傾向にあるが、装飾された注口土器には基部直下に瘤状突起を付したり、環状の貼瘤帯を巡らせた例(34)も存する。

単孔土器は無頸の壺形(47)と筒形(49)が認められたが、当該型式で姿を消す。香炉形土器は亀ヶ岡式土器に続く橋状部を持った類型が明確となる(48・55)。器面に透かしや円孔を穿った鉢形・浅鉢形土器(56・57)も、同様の用途が推定されるが、当該型式以降は台付の異形土器と共に、橋状部を持った香炉形土器に収斂されたのであろう。

風張(1)遺跡では優品が多く出土した第63号竪穴住居跡と第100号竪穴住居跡、それに住居内から多数の土器が出土した第32号(市道)竪穴住居跡は、集落内でも特別な位置づけがなされていたと考えられる。第63号は集落の北西端の中規

模な住居、第100号は集落の西側で斜面の下端の大型住居、第32号(市道)は集落北端のやや大型の住居で、いずれも環状集落の外周に位置している。それぞれの居住区域の中心的な地位を占めていたと推測され、それまで南側に集約的であった集落構成から、環状に分散した構成へ変化した様相が窺える。

(5) 風張(1)遺跡出土の十腰内5式新段階について(図12-1~33)

十腰内5式新段階は刺突・刻目技法に特徴づけられ、筆者の瘤付土器第Ⅲ段階に相当するが、東北中部・南部に比べ型式内容が判然としないのが実情である。新井田川流域では後述する階上町滝端遺跡第17号住居(森 2000)と岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡SA51住居跡(田鎖・斉藤 1995)が、一括性の高い資料となっており、近年青森県の津軽地方では川原平(1)遺跡(中嶋ほか 2006)、秋田県の米代川水系では漆下遺跡(菅野ほか 2011)といった山間部の遺跡で、当該型式の良好な資料が報告されている。型式内容の吟味

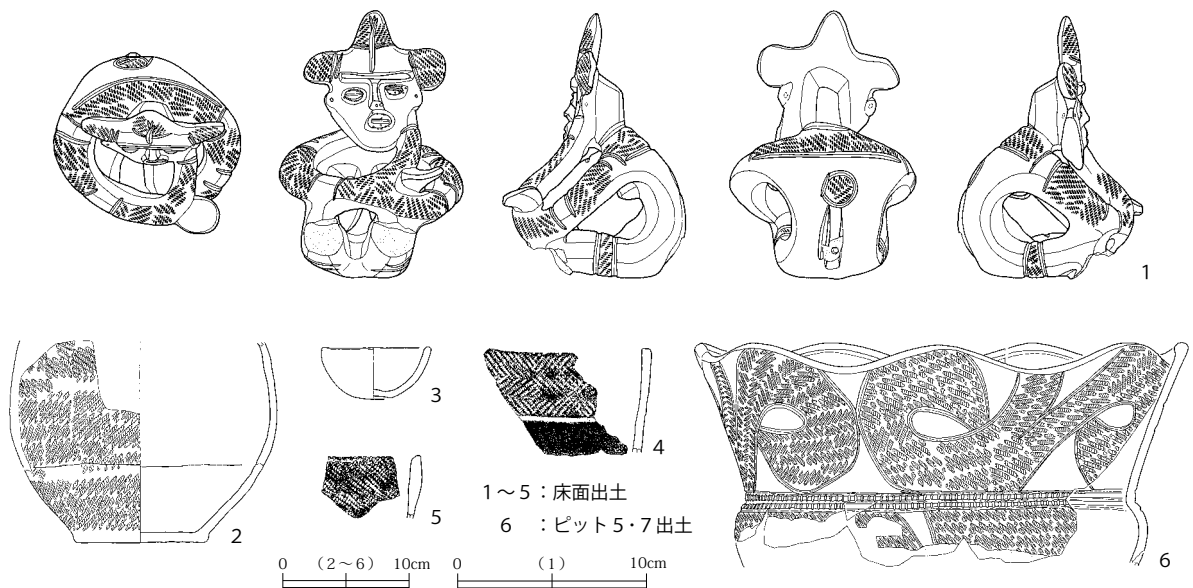


図13 風張(1)遺跡第144号竪穴住居跡出土土器と頬杖土偶(十腰内3式)

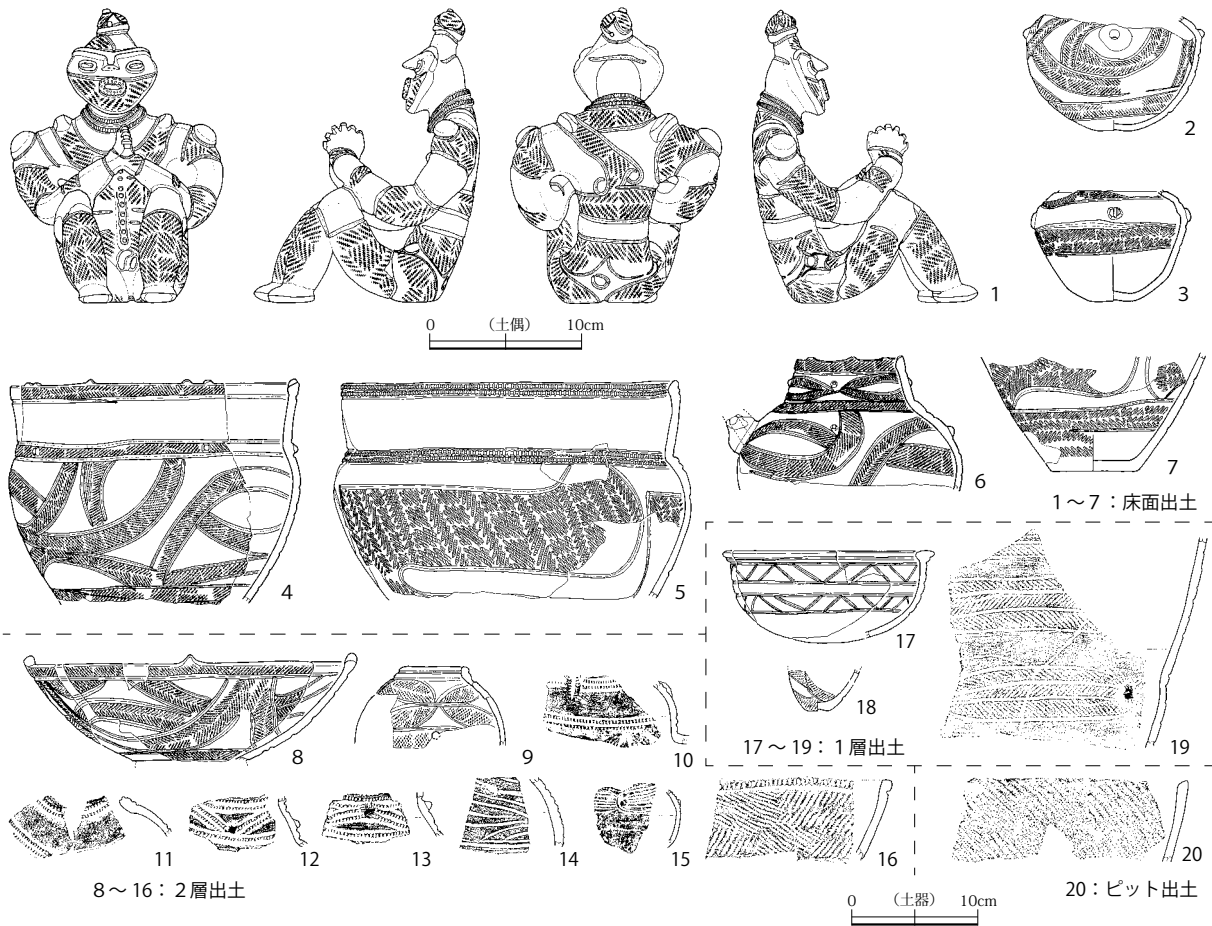


図14 風張(1)遺跡第15号竪穴住居跡出土土器と合掌土偶(十腰内4式古段階)

はこれからの課題となっているが、内容が不明瞭なのは、先行型式に比べ遺跡数が著しく減少したとの指摘を免れないようにも思われる。

当該型式の器種構成は、深鉢形土器、鉢形土器、

浅鉢形土器、壺形土器、注口土器を基本とし、香炉形土器が加わる。これまで貼瘤が多用されていた口縁部は、刺突列や刻目列に取って代わり、瘤状突起は屈曲部等の特定の部位や文様の要所に限

られる。また無文土器の占める割合が、更に高くなっている。

装飾の深鉢形・鉢形土器は、口頸部が直上したA類と屈折したB類が存するが、後者の方に主体がある。平縁が大半を占め、文様は頸部のみに展開し、屈折は弱まり体部は無文となるが、大波状口縁も僅かに残存する(2)。口端に小突起を配し、口縁部に刺突・刻目列を巡らせた例が多いが、特に指頭や棒状工具による押圧で粘土を掘り起こした刺突列(4・14・15)が、当該域の特徴となる。頸部は弧線を基調とした磨消文様や、入組帯状文等の細身の縄文帯を組み合わせた磨消文様が展開するが、刺突や刻目を充填した例も存する。また頸部が無文で、屈曲部に刺突列と瘤状突起を配し、体部に縄文を施した例(25)も見られる。底部は弱い上げ底となるが、20のような外面を凸面状に作出した形状は、新井田川・馬淵川流域の晩期初頭の特徴になっており(小林圭一 2010)、その萌芽が当該型式にあったことが窺える。なおA類の装飾深鉢形土器については、資料が乏しく判然としないが、口縁部にはB類と同様の刺突・刻目列が巡らされ、体部の文様は上方退縮の過程にあったと想定される。

鉢形土器や浅鉢形土器についても判然としないが、無文の例が多く、底部は弱い上げ底となり(21)、高い高台が付された例(22・23)も認められる。

壺形土器も明瞭でないが、注口土器は器高の高い3段作りが多く見られる。長い口縁部、やや凸彎した頸部、球状を呈した体部、小さく作出された底部に特徴づけられ、口縁部は直線的又は内彎気味に外傾し、体部上位が張り出しており、底部は低い高台付となる。無文化の傾向にあるが、頸部に弧線を基調とした文様を配した例(30・31・33)も散見される。注口部は細長く外反気味に屹立し、多くは基部直下に袋状の膨らみを持ち、先端が窄まる傾向にある。器高の高い2段作りも存したと推定されるが、広口壺形の27は底部の形態から当該型式に比定した。

風張(1)遺跡の当該型式は、先行型式に比べると見劣りした内容と言わざるを得ないが、集落北側の第49号竪穴住居跡(村木 2008)、集

落北西側の第64号竪穴住居跡(村木・小久保 2003)、同じく第68号竪穴住居跡(村木・小久保 2003)、同じく第75号竪穴住居跡(村木・小久保 2003)、集落南端の大型住居跡である第148号竪穴住居跡(村木 2005)、それに切られた第153号竪穴住居跡(村木 2008)の6棟が該当する可能性がある。しかし文様の明確な土器が少なく、特定は困難なのが実情である。資料の僅少性の背景には、該期に集落が廃絶され、集団が対岸の是川中居遺跡に移住したことがあったと考えられる。長期間にわたり墓域を中心とした環状集落が維持されていたが、何らかの理由で集落の継続が困難となり、集落移転が選択されたのであろう。

5 風張(1)遺跡の集落変遷について

上記した筆者の型式区分を適用すると、風張(1)遺跡では5階梯にわたる集落の変遷が観察される。後期後半の住居総数188棟の内、128棟の型式が特定され、約2/3の住居の推移を明確にすることができた。その内訳は、十腰内3式21棟、同4式古段階35棟、同4式新段階13棟、同5式古段階50棟、同5式新段階9棟と算出され、十腰内4式新段階と同5式新段階に住居数が減少している。年代幅が一定との保証は無く、単純に比較することに問題もあるが、前者の時期は近隣の是川中居遺跡(村木・小久保 2004、工藤・小笠原 1999)や檜館遺跡(小田川 2003)でも住居跡が検出されており、遺跡周辺に分散した居住形態に起因した可能性が考えられる。また後者の時期は集落の廃絶期となっており、是川中居遺跡へ移転したため少なかったと見積られる。

十腰内3式に忽然として大規模な集落が出現したが、それ以前の当該調査区域には、縄文中期後葉～末葉の小規模な集落が存したに過ぎず、十腰内1式の集落は遺跡北側の舌状台地先端に形成されていた。先行する十腰内2式相当の遺跡は近隣には見当たらず、他の地域から集団が移住してきたことで、風張(1)遺跡の集落が成立したと想定される。

十腰内3式(図15) 十腰内3式では21棟の住居跡を特定したが、斜面上位の東側が2棟で、

南側 14 棟、西側 3 棟、北西側 2 棟で構成され、北側と南東側が空白域となる。斜面の下方の南側と西側で大半を占め、斜面上位は僅かでしかないが、環状を企図した構成となっており、南側では住居帯の外周付近に集中する。従って集落の成立時から、墓域を意識してレイアウトされていたと推定される。また当該型式の住居同士の重複は、南側でも南端に限られる。なお頬杖土偶（図 13 - 1）が出土した第 144 号竪穴住居跡は、集落の南側に位置している。

十腰内 4 式古段階（図 16） 十腰内 4 式古段階では 35 棟と増加するが、斜面上位の北側 3 棟、南東側 6 棟で、斜面下位の南側 19 棟、北西側 1 棟、西側 6 棟で構成され、東側が空白域となる。先行型式と同様に半数以上が斜面下位に集中するが、南側では十腰内 3 式よりも内側に構築される傾向が見られる。また大型住居跡が南側（20 号住）と西側（117 号住）に存しており、南側の 126 号住と 96 号住、南東側の 178 号住が掘立柱建物跡（8・9・13・17・18 号掘）に切られている。なお合掌土偶（図 14 - 1）が出土した第 15 号竪穴住居跡は、住居が密集した斜面下位の南側に位置している。

十腰内 4 式新段階（図 17） 十腰内 4 式新段階では 13 棟と激減する。型式設定の当否も含め様々な理由が考えられるが、筆者は上記したように周辺遺跡への分散化を想定している。斜面上位の北側が 1 棟、南東側が 2 棟で、残り 10 棟は斜面下位の南側となる。先行型式と同じ住居帯となっており、同式及び後続型式と重複関係にある住居も少なくない。大型住居跡は認められないが、住居の密集区域にもかかわらず、住居の重複が見られず、出入口を土坑墓群に向けた 163 号住は、特異な住居であったように思われる。また南東側の 182 号住が、第 23 号掘立柱建物跡に切られている。

十腰内 5 式古段階（図 18） 十腰内 5 式古段階は 50 棟と、最も多くの住居跡が検出された。斜面上位の北側が 6 棟、東側 4 棟、南東側 10 棟、南側 12 棟、西側 6 棟、北西側 12 棟で、南側への偏在の傾向が薄らぎ、土坑墓群を取り囲むように均一に分布する。北側と北西側では、当該型式の住居同士の重複が見られるが、南側や南東側（21・

22 号住）の住居帯では殆ど重複せず、径 3～6 m の比較的小型の住居が多い。また南側では 192 号住、西側では 149 号住と 100 号住、北西側では 67 号住と 129 号住、北側では 32 号（市道）が大型住居跡となっており、各ブロックの中でも特異な地位を占めていたと想定される。また南東側では 188 号住、南側では 91 号住と 97 号住、140 号住、北側では 158 号住が、掘立柱建物跡（1・2・5・6・13・14・15・16 号掘）と重複するが、いずれも掘立柱建物跡に切られている。当該型式を境にこれまでの楕円形プランで地床炉の住居形態から、円形プランの石組炉へと変化するが、楕円形プランや地床炉の住居も多く見受けられ、過渡的様相を留めている。

十腰内 5 式新段階（図 19） 十腰内 5 式新段階は 9 棟と、最も少なくなっている。斜面上位に偏在し、北側 3 棟、北西側 4 棟、南側 2 棟となる。径 5 m 前後の円形プランで石組炉を持つ例が多く、壁柱穴を複数列巡らせた拡張の痕跡も認められる。但しいずれの住居とも出土土器が少なく、型式の特定が困難となっている。南側の 148 号住が唯一の大型住居跡となっているが、当該型式の 153 号住を切って構築されている。また当該型式の住居跡と掘立柱建物跡の重複関係は認められない。当該型式を持って集落は終焉を迎えており、この時期に是川中居遺跡への移住が敢行されたと推測される。

小 結 風張 (1) 遺跡は共同墓地を中心に同心円状の住居が配列された環状集落となっているが、集落の変遷を年代順に追ってみると、十腰内 3 式～4 式新段階にかけた時期は集落の南側に主体があつて、十腰内 5 式古段階～同式新段階にかけて共同墓地を均一に取り囲む構成へと拡がっている。

図 20 は地形測量図と遺構全体図を合成した図 7 を拡大したもので、等高線は調査前の地表の地形を示している。土坑墓群付近の 24 m と 23 m の等高線を見ると、24 m の等高線が斜面上方に入り込むのに対し、23 m の等高線が斜面下方に張り出し、22 m の等高線も同様となっている。想像をたくましくすると、等高線の変化から土坑墓群付近を平坦に整地した可能性が考えられ、張り

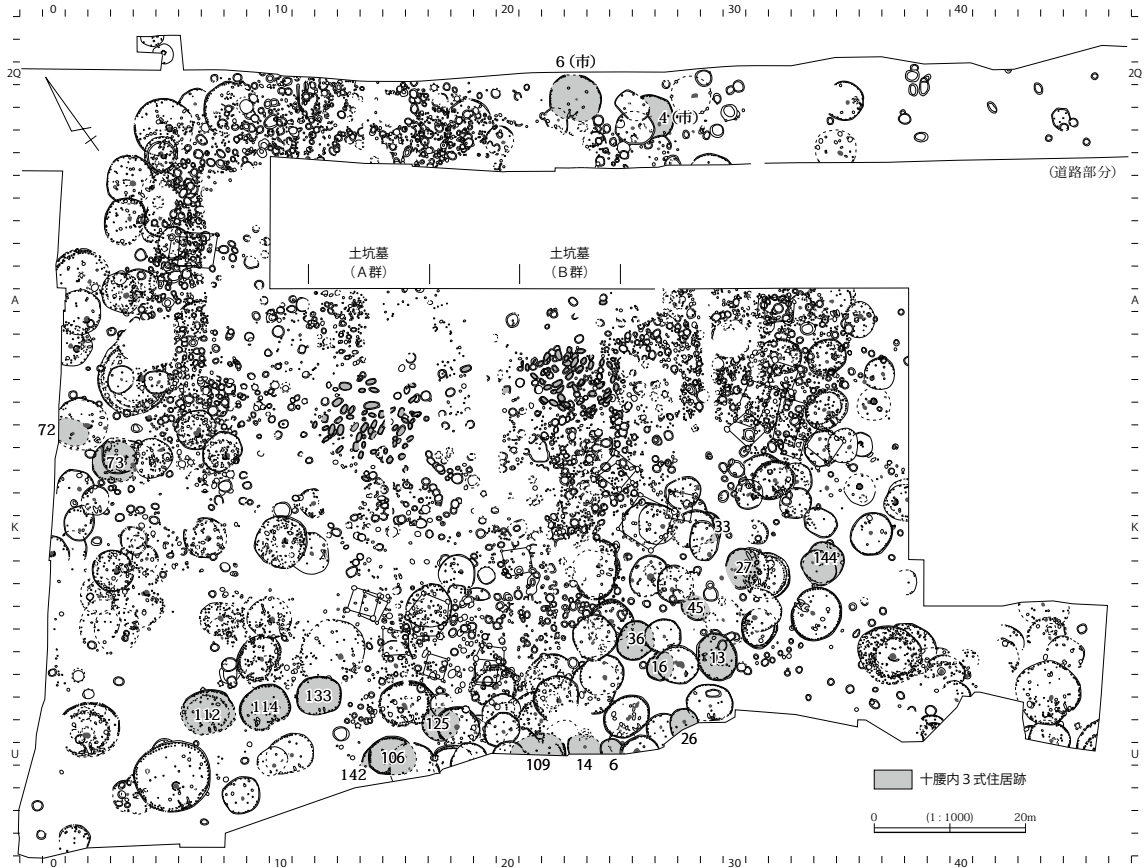


図 15 風張(1)遺跡の集落変遷図1(十腰内3式)

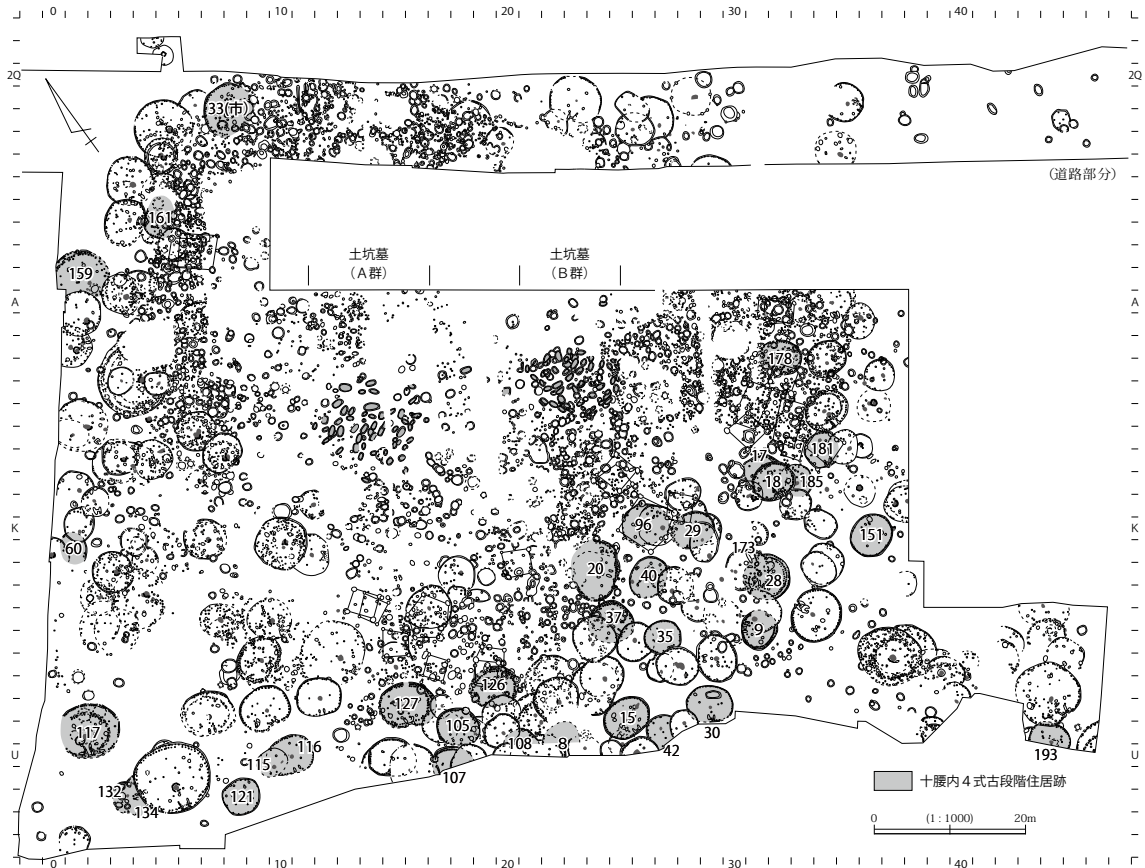


図 16 風張(1)遺跡の集落変遷図(十腰内4式古段階)

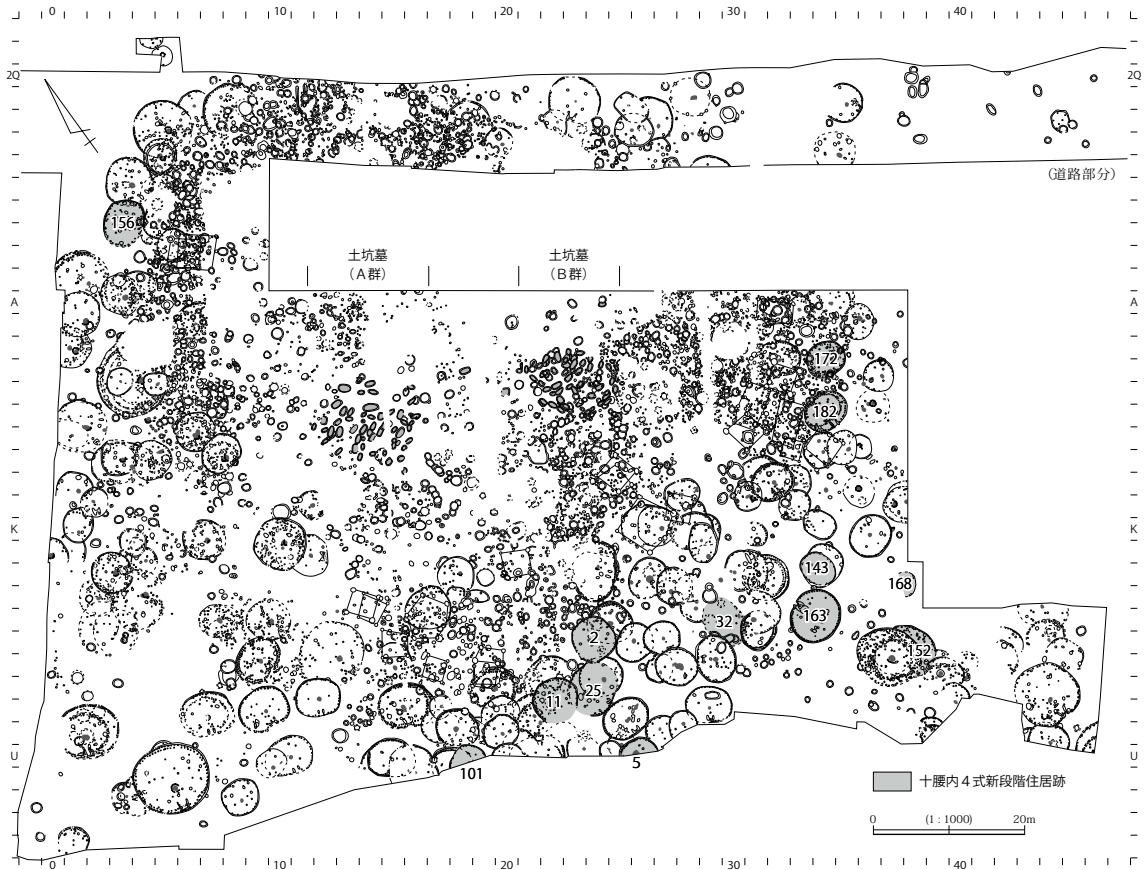


図 17 風張(1)遺跡の集落変遷図3 (十腰内4式新段階)

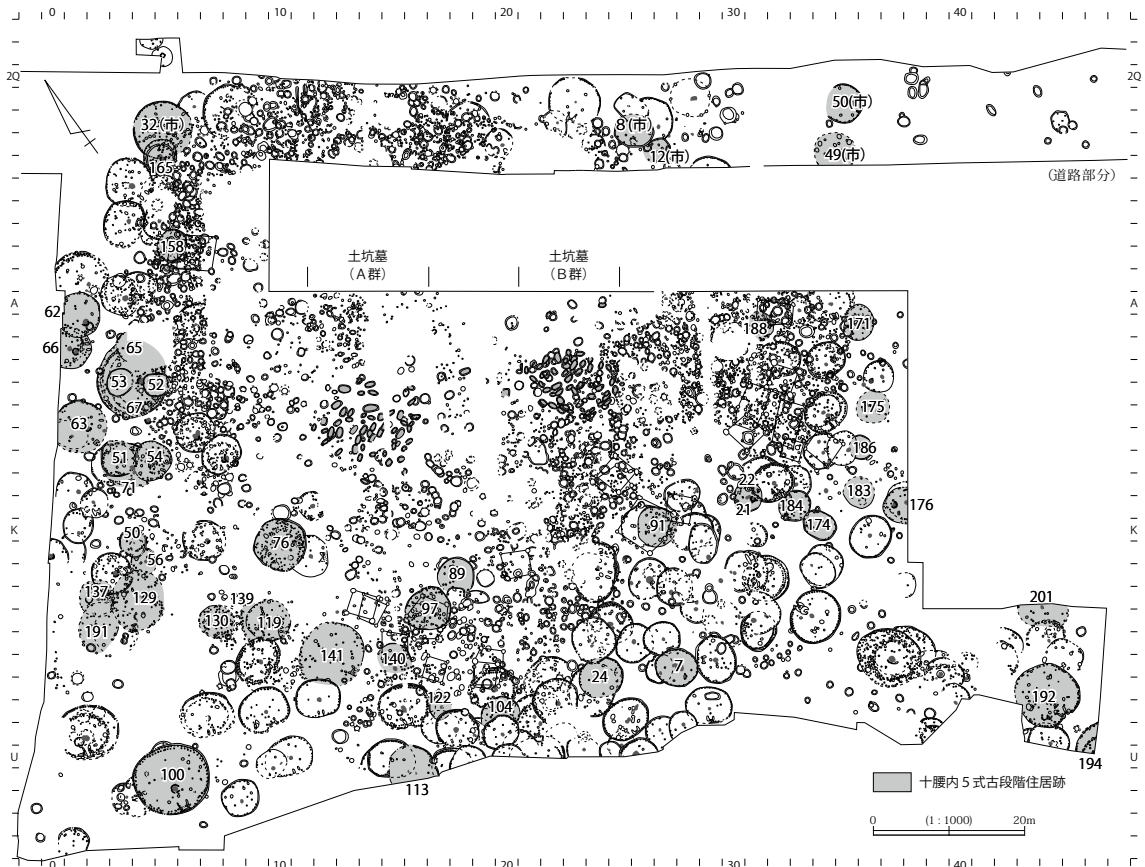


図 18 風張(1)遺跡の集落変遷図4 (十腰内5式古段階)



図19 風張(1)遺跡の集落変遷図5 (十腰内5式新段階)

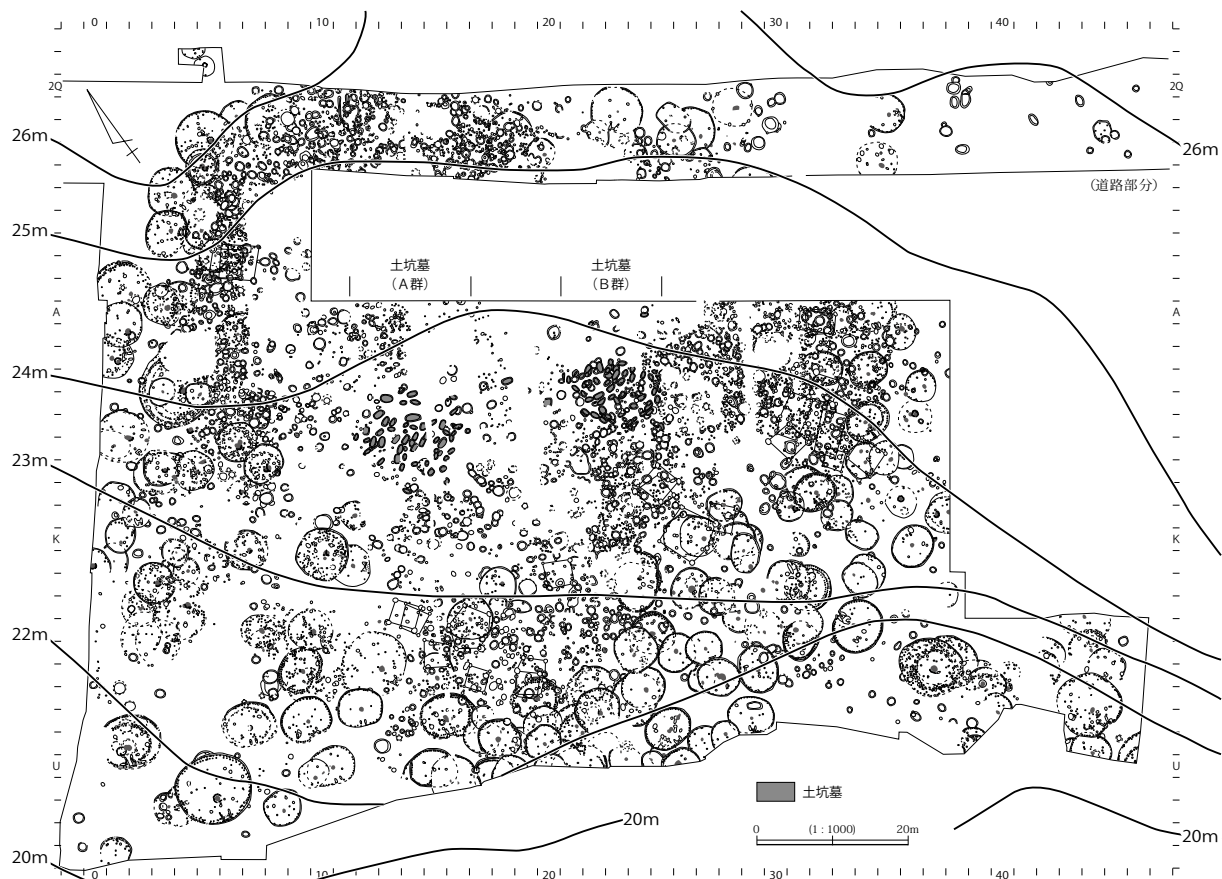


図20 風張(1)遺跡の集落構成と等高線

出した西側に十腰内3式の3棟の住居跡（112・114・133住）が並列しており、集落の成立当初に整地が行われていたと推定される。

また報告書に拠ると、土坑墓A群の第122号土坑墓（図8）のみが、後期中葉の頃と位置づけられている（村木 2008：189頁）。同土坑墓は径50cm、深さ36cmの円形で、底面に礫が敷き詰められ、土坑内から翡翠製玉類2点と粗製深鉢の破片（0段多条RL）が出土した。後期中葉に比定された根拠は定かでないが、十腰内3式の土坑墓であるとすれば、A群の中心に位置し、他の土坑墓とも重複しないことから、土坑墓群の象徴的な施設となっていた可能性が考えられる。一次埋葬とするには小さ過ぎるため、再葬された可能性も否めないが、集落の創設に関わった有力者または先祖祭祀として複数人の骨格の一部が埋葬・合葬され、上部には墓標等の記念碑的施設が構築されていたと推測される。

6 是川中居遺跡の集落構成

是川中居遺跡は新井田川の対岸、風張(1)遺跡の西方800mに位置する。河口から新井田を8.4km遡った、標高10～20mの西から東側に緩く傾斜した低位段丘上に立地しており、遺跡は八戸市縄文学習館が所在する台地部分（東西200m、南北100～140m）とそれを挟んだ北側の長田沢^{ながたさわ}と南側の低湿地部分により構成される。是川中居遺跡の面積は32,000㎡を測り、一王寺(1)遺跡が326,000㎡、堀田遺跡が18,000㎡で、是川石器時代遺跡を構成する3遺跡の合計は376,000㎡となる。是川中居遺跡は大正期からたびたび発掘調査され、土地所有者であった泉山岩次郎・斐次郎兄弟以外にも、喜田貞吉、長谷部言人、甲野勇等の著名な研究者も来訪して調査を実施しており、これまで発掘調査された面積の合計は遺跡範囲の1/4に相当すると見積もられる^{注5)}。

(1) 是川中居遺跡の低湿地

是川中居遺跡の低湿地は、遺跡の北側と南側の2ヶ所に存している。共に遺跡の西側を流れる新井田川に向かって東西方向に延びた沢が埋没して

低湿地となっており、捨て場が形成されていた（図21）。

南側の低湿地は1926年に発見され、1929年に甲野勇氏等の大山史前学研究所による発掘調査で「特殊泥炭層」として報告された（甲野 1930）。特殊泥炭層は漆黒色を呈し、多少の繊維状有機物を混在するが、集中して投棄されたクルミ・トチノキ等の堅果類で構成されており、層厚は25～50cmを測る。1929年の調査では大洞BC式土器を主体に木製品が大量に出土したが、1999～2004年の南側低湿地の調査（C・D・F・H・O区）では3ヶ所の捨て場と水場遺構（大洞B式期）が検出され、捨て場1の最大層厚は165cmに達している。

「特殊泥炭層」は人為的投棄による堆積層で、連続性をもって集中的に投棄された堅果類が、同時に捨てられた植物質遺物の腐敗・分解の進行を遅らせたと考えられている。遺跡の中央から縁辺へと廃棄を繰り返した結果、北側の沢跡に形成された捨て場2が大洞B2式、南側の沢跡の捨て場3が大洞BC式主体となっており、土器や石器・石製品の他に、木製品、漆製品等が良好な状態を保ったまま大量に出土した。また捨て場3の下位からは木材をコの字状に配置した水場遺構が検出されている。

北側の長田沢地区は東西方向に延びた幅25～50mの沢地で、北東側の1区で大洞C2～A（古）式期の捨て場（東西8.5m、南北3.6m）を検出した。層厚30～80cmの黒色（一部褐灰色）の泥炭層で、土器・土製品や石器・石製品の他に、漆作業に係わる資料（漆の染み込んだ編布）、木製品、クルミ・トチノキ等の堅果類が出土したが、南側低湿地のような植物遺体層の集中は顕著ではなかった。

同遺跡の花粉分析から、住居の周囲にクリ林、傾斜地にトチノキ林やオニグルミ林を配置し、その周囲にコナラ亜属やクルミ属、ニレーケヤキ属などからなる落葉広葉樹林が広がっており、人為的な生態系から植物食を確保していたと推定されている。また晩期以前は湿性植物が生育する環境にあったのに対し、晩期になると周囲が開け乾燥した環境に変化したことが指摘されている（村木

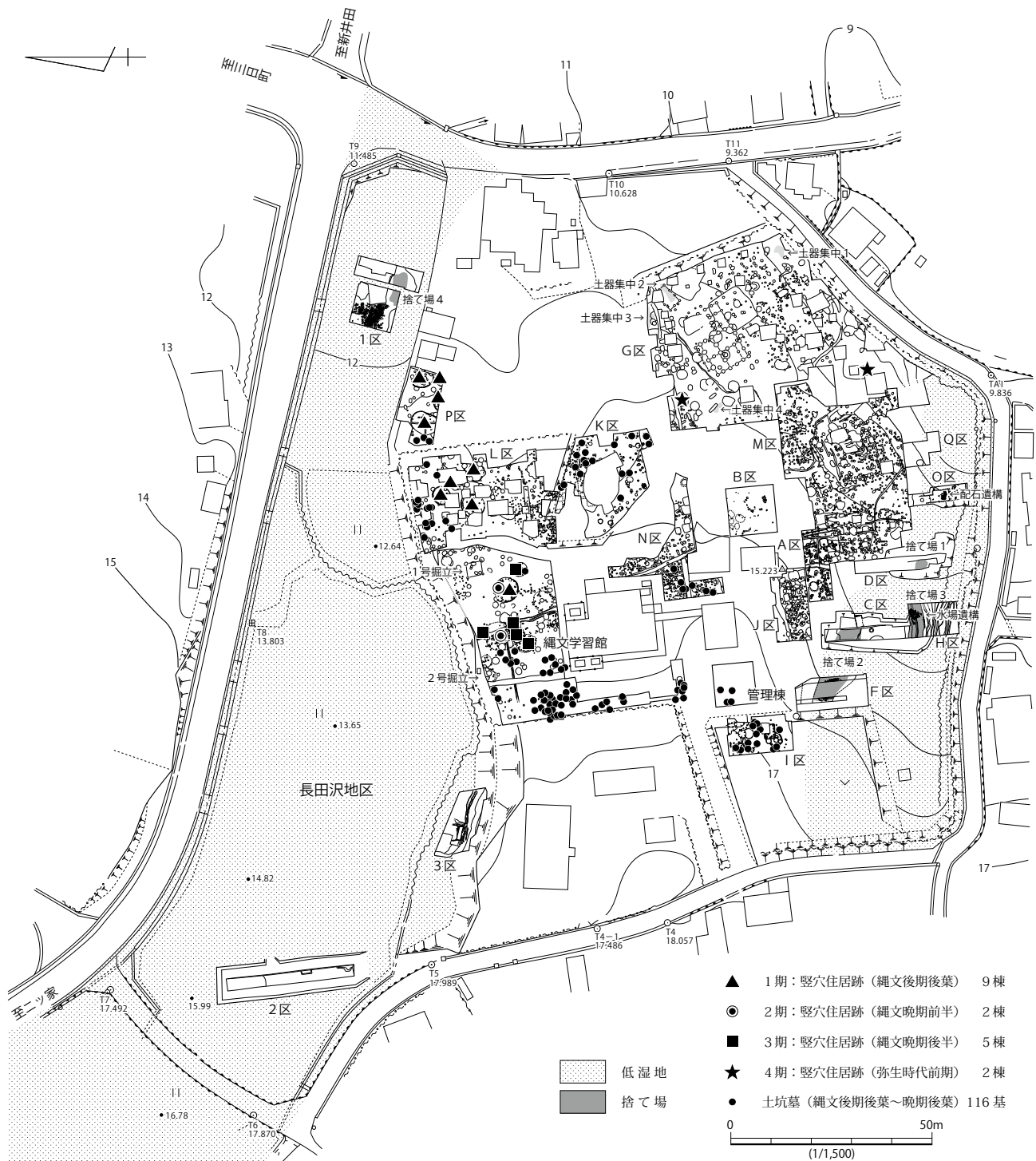


図 21 青森県八戸市是川中居遺跡全体図（1500分の1）

ほか 2005)。

(2) 是川中居遺跡の集落構成

台地部分では縄文後期後葉（十腰内4式期）～弥生前期（砂沢式期）までの遺構が検出されている（図21）。しかし後世の削平を受け、遺構の残存状況は良好とは言えない。4期に区分した集落の変遷は、以下の通りである。

1期（縄文後期後葉） 風張(1)遺跡が盛行した十腰内4式新段階が主体となる。台地の北側（長田沢寄り）に居住域が形成され、竪穴住居跡9棟と掘立柱建物跡1棟が検出された。L区3棟（第1～3号竪穴住居跡）と縄文学習館地点の1棟（第5号住居跡）が十腰内4式新段階に位置づけられ（小林圭一 2015）、P区で検出された4棟（1～4号竪穴住居跡）も十腰内4式古・新段階に相当

しており、風張(1)遺跡の集落と並存していたことを窺わせる。

2期(縄文晩期前半) 風張(1)遺跡廃絶後の十腰内5式新段階～大洞C1式期までで、是川中居遺跡が最も繁栄した時期に相当する。縄文学習館地点で竪穴住居跡2棟(第1・2号住居跡)が検出され、居住域は引き続き台地の北側に営まれており、近接して墓域が形成され、土坑墓が台地の北側縁辺からI区に向かって半円を描くように配置されていた。また南側の低湿地には水場遺構や捨て場(特殊泥炭層)が形成され、北側の長田沢でも捨て場の形成が開始される。

3期(縄文晩期後半) 大洞C2式～同A'式期が相当する。縄文学習館地点で竪穴住居跡5棟(第3・4・6・9・10号住居跡)が検出され、居住域は北側に営まれているが、土坑墓はK区に集中しており、墓域が台地中央部に移行したと想定される。大洞C2～A(古)式にかけて北側の長田沢の捨て場の形成が活発化しており、南側低湿地では沢が埋没した後、捨て場3の南岸斜面に沢水を迂回させる導水路として2条の溝が掘削されている。また南側低湿地へ傾斜したO・Q区では盛土整地層が確認され、その上面に屋外炉跡(第6号屋外炉)と配石遺構(第1号配石遺構)が検出されている。大洞C2式までに台地の中央部を削平した土砂で整地したと考えられ、同層には大洞C1～C2式土器が含まれており、土地が大規模に改変されたことになる。

4期(弥生前期) 砂沢式期に相当する。台地南東側の新井田川寄りのG区に主体が移り、竪穴住居跡2棟(1・2号住居跡)、土器集中地点4ヶ所(土器集中1～4)、埋設土器4基(1～4号埋設土器)が検出されている。土器集中地点では砂沢式土器(鉢・浅鉢・台付浅鉢・壺・甕形土器)と遠賀川系の壺形土器で構成されており、埋設土器は砂沢式の壺・甕形土器が使用され、特に赤色顔料や骨粉を内包した4号埋設土器(底部穿孔の壺形土器棺)から碧玉製管玉が10点出土した。

小 結 是川中居遺跡では縄文後期後葉(十腰内4式古段階)から弥生前期(砂沢式)まで継続的に集落が営まれていたが、近年の調査では後期後葉十腰内5式古段階と晩期末葉大洞A(新)式

～同A'式の土器が少なくなっている。前者についてはまだ風張(1)遺跡に主体があり、是川中居遺跡は小規模な分村として機能していたが、後者の時期は過去の調査資料から確認することができるものの、一時的な衰退期が存した可能性も考えられる。捨て場からは豊富な出土品が得られている一方、台地上の遺構数はそれ相応とは認めがたいように思われる。土坑墓は合計で124基確認されているが、住居跡は縄文後期後葉が多数を占め、出土品の主体となる大洞BC式期の居住施設は判然としない。晩期の住居跡は掘方が浅く壁が消失したものが多く、時期の特定は困難であるが、晩期後半の土地改変や後世の削平で消失した可能性も否定できない。集落は風張(1)遺跡が廃絶された十腰内5式新段階以降に本格化し、新井田川下流域の拠点遺跡として長期にわたって機能したが、弥生前期砂沢式期をもって集落は廃絶され、再び風張(1)遺跡に主体が移行したと考えられる。

7 風張(1)遺跡以前の集落(丹後谷地(1)遺跡の集落構成)

風張(1)遺跡の集落の形成は十腰内3式期に開始されたが、それ以前は十腰内1式期の住居跡11棟が丘陵先端部で検出されたものの、直前の十腰内2式期の様相は判然としない。新井田川下流域にも有力遺跡は存在せず、十腰内1～2式期の最も近接した拠点遺跡は、丹後谷地(1)遺跡と田面木平(1)遺跡となるが、後者の主体は後期初頭～前葉(十腰内1式)にあり、十腰内2～3式期の住居跡はそれぞれ1棟ずつに過ぎない(工藤ほか1988)。

丹後谷地(1)遺跡は、新井田川水系ではなく馬淵川支流の土橋川沿いに立地するが、風張(1)遺跡の北西方2.5kmに位置している(図6-41)。同遺跡は標高40～60mの段丘緩斜面に立地し、東西に長い調査区内で竪穴住居跡(66棟)が東・中央・西の3ブロックに分かれており(図22)、縄文中期末葉～後期中葉(十腰内2式)に主体がある。続く十腰内3式は住居跡は確認できず、その後十腰内4式古段階(第46号竪穴住居跡)と同式新段階の住居跡(第44・60・61号竪穴住居跡)が、調査区北東部の舌状に張り出した部分で、2～4

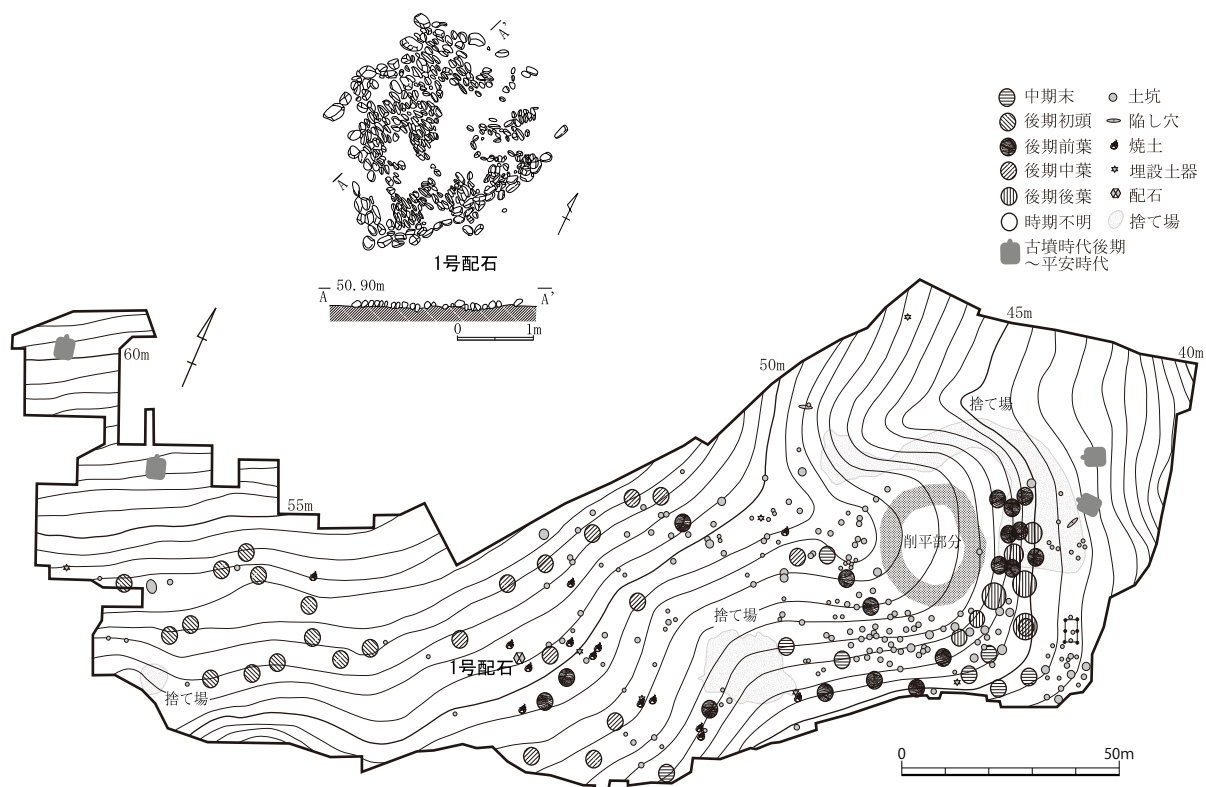


図 22 丹後谷地遺跡 削平部分と捨て場・1号配石

mの距離をおいて南北方向に並列して検出されている（工藤ほか 1986）。

集落は中期末葉を始まりとして、東（中期末）→西（後期初頭）→東（後期前葉）→中央（後期中葉）→東（後期後葉）と中心を移しているが、それに伴い捨て場も3ヶ所に形成されている。その中で最も大きな拡がりを持つのが、3期にわたり繰り返し居住施設が構築された東側ブロックの北側で、小林克氏はこの東側ブロックの捨て場に囲まれた22×25mの範囲の土地が削平されている可能性を指摘している（小林克 2014：28－29頁）。同氏は報告書の航空写真を見ると調査区全体が黒褐色であるのに対し、当該域は地山の露出が見て取れることから、東側ブロックの捨て場の形成に伴い削平された痕跡で、後期前葉と後葉に造成されたと推定している^{注6}。東側ブロックにはフラスコ状土坑を含む多数の土坑群が存するが、これ等が墓坑として利用され、この地業が後期前葉の祖霊祭祀的空間の造成であった可能性を指摘している。

十腰内2式期の住居群は中央ブロックに形成され、約350個の礫（その内約50個が焼け礫）を集めた配石遺構（南北2.6m、東西2～3.1mの

台形）が祭祀遺構となる（図22）。同ブロックでの土地改変の有無は判然としないが、先祖祭祀空間の造成がこの地域で踏襲されていたと見るならば、風張(1)遺跡でも墓域の土地が改変された可能性が高く、共通性を指摘することができる。風張(1)遺跡の環状集落は十腰内3式期に移住してきた集団によって開始されたが、周辺遺跡を見渡すならば、丹後谷地(1)遺跡の構成員が関与していた可能性も十分考えられる。

8 青森平野周辺の縄文晩期遺跡の様相

新井田川下流域において縄文後・晩期で遺跡の内容が明確になっているのは、前記した風張(1)遺跡と是中居遺跡に限られる。当該域との比較として同じ青森県内の青森平野周辺の晩期の様相を見てみたい。

本州最北端に当たる青森平野は、陸奥湾（青森湾）に面した東西約10km、南北約6kmの北に開いた三角形の平野である。東側は夏泊半島西南端、西側は津軽半島東端の範囲で、平野の南方は八甲田火山山麓地と火山性台地に囲まれており、平野はこれ等の山中から発する中小河川（野内川・駒